みみノロッ！

梵 弥太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
みみノロッ！

【Ｎコード】
Ｎ１３８８Ｌ

【作者名】
梵　弥太郎

【あらすじ】
とある高校生・牧口　真晴は外出時に財布を落としてしまう。
財布を探していると、クラスメート・中沢春巳の眼鏡を見つける。
お人好しの牧口は、駅の路地裏で泣いている中沢を見つけるのだが
…

～知らないうちに生えてきちゃったんです！～（前書き）

どうもっす！
ライトノベルを書きます！
獣耳好き集まれ！！

一年に一回は掲載しまーす（笑）

～知らないうちに生えてきちゃったんです！～

人気のない教室で、一人の少女が、背を向けた少年に向かって叫んだ。
「待ってよ！　健！」
健と呼ばれる少年は、少女の言葉を気にせず歩き始める。
「行かないで！　私を一人にしないで！」
少女は叫び続ける。
「あなたはそんな人だったの！？　そんな、残酷な人だったの！？」
少年の足が止まり、少女の方を振り向く。
「仕方ないだろ！　皆のためには、こうするしか方法が無かったんだ！」
少年は強く言う。
「『仕方ない』って、あなたはいつもそうじゃない！　大きな壁が立ちはだかると、仕方ない仕方ないって言って、言い訳ばっかり！」
少年は、返す言葉がない。
「失敗したっていいじゃない！　間違えたっていいじゃない！　言い訳したって過去には戻れないのよ！」
少女の目に涙が浮かぶ。
「だから…だから！　今すぐ入れてあげて！」
少女はひたすら叫ぶ。
「この空のシャー芯入れに、シャー芯を入れてあげて！」
…え？
「シャー芯が入ってれば、空のシャー芯入れとしてカチカチするだけじゃなくて、芯が入ってるシャー芯入れとして使えるから！」
…？
「で、でも、シャー芯はどこから取るんだ？」
「私のシャーペンからよ」
「そんなことしたら、おまえのシャーペンが使えなくなるぞ！」

「いいの…だって、私、」
…。
「幽霊なんだもの」
…何だコレ。
「好美…おまえ、幽霊だったのか…」
駄作以外の何物でもねーな…。
朝の報道番組で紹介されてたから、面白いのかな～と思って映画館に来て見てみたら、このザマだよ…。
俺はもうどうでもよくなって、眠るためにイスに横になった。
数分が経つと、俺は眠りについていた。

まぶたの隙間から光が入ってきて、俺は目を覚ました。会場は照明がついていて、映画はすでに終わったようだ。
映画館を出ると、駅前の本屋に向かう。今日は俺の好きな作家の最新作の発売日だからだ。
早く読みたい、という思いが俺の歩を進め、いつもより早く着いた。店内に入り早速目当ての本を発見。レジに向かい、精算しようとしたら、
財布が無い！？
ポケットをまさぐり、カバンの隅々まで探す。何回探しても財布は無かった。
スリされたか？　それともどこかで落としたか？
目当ての本を元あった場所に返して、これまで歩いてきた道を逆戻りする。
下を向きながら歩いて財布を探していると、
眼鏡があった。
放っとくのも気が引けるので、とりあえず拾う。
周りを歩いていく人達に誰か困っている人はいないか見回すが、そんな人は一人もいないようだ。
さてどうしたものか。

交番に届けても、眼鏡では相手してくれまい。
自分の財布の事もあるし、持ち主には悪いけどこれは放っとくか。
そう思って眼鏡を地に置こうとしたら、眼鏡に彫られた筆記体のローマ字が目に入った。
「Ｎａｋａｚａｗａ　Ｈａｒｕｍｉ」ってもしかして…
俺のクラスメート！？
　中沢春巳。六坂高校一年二組の出席番号四十二番。そいつは、クラスではかなり目立たない方だ。休み時間にいなくなっても気にかけるのは友達ぐらい。
　喋ったことは一度も無いと思うな。そもそも声も聞いたことがない。
そんな仲良くもないがここで拾ったのも何かの縁だ。お人好しの俺は中沢を探すために歩き始める。
と、すぐ傍の路地裏で少女が泣いているのを見つけた。すぐ駆け寄る。
「どうしたんですか？」
その少女は俺の声に気づくと、
頭から猫のような耳を出した。
…え？　耳？
「その声は、も、もしかして…」
目を潤ませ、少女が振り向く。
「牧口君…？」
それはまさに、「猫耳少女」。俺の名前を知っているところを見る限り、中沢春巳と考えられる。その一度見たことがあるはずの姿に、俺は驚愕することしかできなかった。
「な、何だこれ…！？」
俺にとって夢のような者だが、見たくない者でもあった。
　いや、「見えたくなかった者」という表現の方が適切だろうか。
とりあえず、
「ど、どうしたんだよ？それ？」

「それが…私」
ゴクリ。
「どうやら」
ゴクリ。
「眼鏡を落としたみたいなんです」
「…そっちかよ！」
思わずツッコむ。
「え…？　眼鏡のことじゃないんですか？」
「いやいや！　普通に考えて頭の猫耳の事だろう！」
そう俺が言うと、中沢は複雑な表情になる。
「えっと…牧口君ってそういう趣味持ってるんですか…？」
…変な誤解されてる感じがするなあ…？
「あのさあ…お前、自分の頭触ってみ」
「え？　頭ですか？」
そう言って中沢が頭を触ると、
「にゃあっ！？　耳がある！？」
「今さらかよ…」
「だ、だって…眼鏡がにゃかったんですもん…」
そういう問題なのか…？
あ、そうだ。猫耳を見たことの驚きですっかり忘れてたが、眼鏡を拾ったんだった。
「はい」
俺はポケットに入れておいた眼鏡を取り出し、中沢の目前に出した。
「え…これって私の？」
「近くで拾ったんだ」
「あ…ありがとうございます！！」
眼鏡を受け取った中沢は、嬉しそうに微笑んだ。め、眼鏡がないと、結構いいかも…
初めて見た笑顔が魅力的で、不覚にも頬が緩んでしまう。しかし、にやついた顔を隠す必要はなかった。

だって、
「中沢、どっち向いてんだ？」
笑顔の向く先には「居酒屋　巻口」の看板があった。どうやらきちんと見えていないらしい。
「あ、あれ？　牧口君？　そっちに居たんですか？」
あわわ、と手を探る中沢の手が、今度は俺の目に直撃した。
「ぐあっ…」
「うわっ！？　ごめんにゃさい牧口君！！　大丈夫ですか！？」
また中沢が手を探り始めたので、俺は止めにかかる。
「と、とりあえず俺のことはいいから眼鏡をかけて！！」
「あっ、はい！」
中沢は眼鏡をかけ終えた。俺は目の中の雑菌とまばたきをして戦っていた。
「ごめんにゃさい、牧口君！」
「大丈夫だって！」
お願いだから静かにしていてくれ…中沢はドジっ子みたいだから。
目が痛くなくなったところで、中沢をもう一度見る。
…普通に。普通に考えて、目の前の光景を真に受けることができない。
「あのさあ…」
「はい？」
「その耳さあ、本当は作り物だったりする？」
「いえ、本物です」
そう言うと、中沢は自分の猫耳を指差す。
そうして、意識的に動かした。
「ほら、触らにゃくても動かせます」
その現実ではありえない光景を前に、俺はため息をついた。
「…中沢」
「どうしました？」
俺は中沢の肩に手を置く。

「これから、頑張れ」
そう言って逃げた。
「まっ…待って下さい！にゃんで逃げるんですかぁ～！」
すまない中沢。俺はできない。お前に猫耳が生えてきた理由を知ることが。
「助けてくださいよ～！」
知ったら、頭がどうにかなってしまいそうだ。
「牧内く～ん！」
名前を間違えられたが、それも無視して走り続ける。
財布の事はすっかり忘れていた。

～知らないうちに生えてきちゃったんです！～（後書き）

まだ書き終わってないから後書きなどは書けませんねー…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1388l/

みみノロッ！

2010年10月10日20時39分発行